

# Global Next Leaders Forum 2019

2018年度報告書



**GLOBAL  
NEXTLEADERS  
FORUM**

2019年3月  
グローバル・  
ネクストリーダーズ  
フォーラム学生本部

# ご挨拶

グローバル・ネクストリーダーズ学生本部(以下GNLF)は、2018年3月に新体制に移行して一年を迎え、改めて代替わりの季節を迎えました。この一年もGNLFがその活動を継続させることができたのは、ひとえに、皆様のご支援・ご協力の賜物であり、感謝にたえません。

弊団体は、次世代のグローバルリーダーの育成という理念のもと2010年に設立されて以来、学生を中心とした国際会議である本会議の開催を主軸に活動を続けてまいりました。本会議が、グローバルリーダーとなる上で必要な素質を身につけるための貴重な機会となるよう、プログラム設計をしてまいりました。

2017年度は、2016年度のメンバーの唐突な引退により引き継ぎが一部途絶えてしまっていた影響を受けて、抜本的な運営体制の見直しを迫られた年でした。私も一人のメンバーとしてその渦中にいたことで、構成員の入れ替わりの激しい学生団体という組織ゆえの難しさに直面しました。また、想定外の航空券代の値上がりにより財務状況が逼迫されたこと、本会議の直前まで参加者のコンテンツの調整に翻弄されたことなど、見直しが万全であったとは言えない点もありました。

私は、この一年間会頭として、GNLFの運営体制がより強固で持続的なものとなるよう邁進して参りました。2018年度は参加者の募集開始の前倒しによる予算の安定化を図ったほか、GNLFのアラムナイとの連携強化やパネルディスカッション・ロールプレイングゲームなど新しい形の取り組みをコンテンツに組み込みました。

改めまして、すべてのGNLFの活動は、協賛者・後援者の皆様、講師の先生方を始めとして、多くの方々のご協力の上に成り立っております。GNLFを代表して、深く感謝申し上げます。

今期GNLFは3月に行われました本会議最終日の報告会を以て終了いたしました。2019年度は、記念すべき10周年目の本会議に向けてメンバーを一新し新たなテーマのもとで既に動き出しております。私は会頭を辞任し後任を10期の松本泰平に任せますが、団体内には留まり極力運営に携わる所存です。今後とも、GNLFへの皆様の温かいご指導とご支援を賜れますよう、心よりお願い申し上げます。

2019年3月31日

GNLF2018年度会頭  
林航平 (東京大学医学部2年生)

# 目次

---

## 第1部 2018年度GNLF学生本部 組織概要

1. 活動理念 …01-02
2. 運営体制 …03
3. 後援体制 …04

## 第2部 GNLF2019本会議 東京大会

1. 開催概要 …05
2. 参加大学一覧 …06
3. 議題・本会議構成 …06-08
4. 各セッション  
開会式・基調講演 …09  
セッション0：マイノリティ問題の現状 …10  
セッション1： …11-12  
セッション2： …13-14  
セッション3： …15-16  
セッション4： …17-19  
閉会式・報告会 …20
5. セッション外活動  
文化交流会 …21  
アラムナイとの交流会/観光 …22

## 第3部 その他

1. ご連絡先 …23
2. 会計報告 …24

## 付録：各セッションアンケート質問票 …25-28



## 1-1. 活動理念

国際社会で活躍したい。

そう望むことは簡単ですが、実現することは容易ではなく、必要な資質を身につけるだけでかなりの困難です。誰しもが世界を股にかけた仕事などできるわけではなく、願っているだけで埋もれていく人も数多くいます。

このような現実に一石を投じるべく、私たちグローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムは、グローバルリーダーが活躍する一歩を踏み出す場として、毎年春に1週間程度の期間、本会議を開催しています。グローバルリーダーとは、様々な背景の人と関わりあう国際社会で、一国の代表者として自分のなすべきことを全うし、相互の信頼関係を構築できる人間を指し、たった1週間の本会議は参加される方がそのすべての素質を学べる場にはなり得ないでしょう。

しかし、国際関係に限らずあらゆる対人関係で有用となる、他人との相違を認め合うという能力は、グローバルリーダーに求められるスキルとして最も基本的かつ最も重要なものであり、その獲得は活躍するフィールドを問わず大きな一歩となります。グローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムの本会議は、この差異を前提に互いを理解し尊重する姿勢を参加者の方に身につけていただく場ということが主眼となっており、次にあげる2つの特徴があります。

1点目は、参加国の多様性です。政治的、経済的影響力の大小に関わらず様々な地域の様々な規模の国の参加者を募ることで、会議での前提が先進国視点、大国視点に寄らないよう綿密に参加国が選定されています。一般的に先進国からの参加者に偏ってしまうことの多い国際会議の中で、グローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムは他の国際会議と一線を画しています。自国の代表者として将来を背負っているという自負と責任感に溢れた途上国からの参加者との交流が可能です。

---

2点目は、日本で開催されるということです。特定の宗教派閥に属さない日本で会議が行われ、日本人学生が会議を主催することで、発言者の属する宗教により発言の軽重が生じることを防げます。また、宗教的原因から参加をためらうことを防ぐこともできます。このような理由から日本での開催により多国間枠組みの維持が安定的に可能となると考えています。

このような特色の結果、参加者の学生は、自身の五感を通じて多種多様な学生とともに毎年変化するテーマについて問題を共有し互いの意見を交わし合うことで、個人レベルでの相互理解を深めることができます。そうした経験をすることで、単なる外国人との個人レベルの付き合いを超えて、様々な国の人と生身で接することで世界から見たときの自身の相対的な立ち位置を知ることができます。これにより、自身の考えを絶対的なものではないと認識することで、異なる意見にも寛容になり、耳を傾けることができるようになります。

さて、本会議の設営を担当している私たちも、本会議が自分が当然視していた価値観を再確認し、居場所を相対化するための場であることは変わらず、参加者、支援者の方々のおかげでこのような素晴らしい学習環境が実現できていることを心に深く刻みながら、会議に関わるすべての人にとってこの会議が自己を見つめ直す契機となり、次に向けた確かな一歩となることを願っています。

2017年6月26日  
GNLF第8期・第9期一同  
(2017年7月5日更新)

## 1-2. 運営体制



顧問：遠藤貴（東京大学大学院総合文化研究科国際  
社会科学専攻、教授）

## 9期（2018年度執行代）

会長

林 航平 東京大学医学部2年

財務局長

高木 友貴 東京大学法学部2年

プログラム局長

倉石 東那 津田塾大学文学部2年

募集局長

伊藤 典将 東京大学工学部3年

総務局長

合田 智輝 東京大学工学部2年

日下部紗伎 東京大学工学部3年

新井 宏美 東京大学法学部3年

末尾 陽奈 東京大学医学部2年

田村 珠理

東京大学法学部2年

萩原 雅之

国際基督教大学教養学部2年

横谷 汐香

東京大学教育学部2年

針尾 紗彩

東京大学理学部2年

## 8期（2017年度執行代）

藤田 創

東京工業大学生命理工学院3年

森上 佳媛

東京大学文学部2年

## 10期（2019年度執行代）

大里 優佳

東京大学前期教養学部1年

坂口 友貴

東京理科大学工学部2年

陳 暹知

東京大学前期教養学部1年

坪井 宏樹

国際基督教大学教養学部1年

中村 優花

東京大学前期教養学部1年

松本 泰平

東京大学前期教養学部1年

矢野 未葉

東京大学教養学部1年

## 1-3. 後援体制

---

特別後援

**読売新聞**

THE YOMIURI SHIMBUN

助成

**The Japan News**  
*by The Yomiuri Shimbun*

---


公共財団法人  
平和中島財団

公益財団法人  
三菱UFJ国際財団

協賛


 **Sojitz Foundation**

---

 **三菱商事**


 **株式会社スカラ**

寄付

 **インターンシップ  
ガイド** Internship GUIDE

---

後援

 **東大駒場友の会**

---



**外務省**  
Ministry of Foreign Affairs of JAPAN



## 2-1. 開催概要

---

### 期間

2019年2月18日(到着日)～2019年2月27日(出発日)

### 開催地

東京

### 宿泊地

2019年2月18日～2019年2月27日：国立オリンピック記念青少年総合センター

### 会場

2019年2月22日：新宿Hitopia バンケットHall

2019年2月23日：フィールドワーク

2019年2月24日：Town Seven 8F 貸会議室

2019年2月26日：TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター

上記以外の日程：国立オリンピック記念青少年総合センター 研修室

### 主催

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部

### 参加国・地域

#### >既存参加国

ブルガリア・日本・キルギス・メキシコ・パキスタン・シンガポール・スロバキア・チュニジア(8ヶ国)

#### >新規参加国

アメリカ・ペルー

### 参加人数

本部運営委員：21名

日本人学生：4名

海外学生：各国最大3名ずつ、計17名

一部参加国の教員：6名(アメリカ・ブルガリア・パキスタン・スロバキア・チュニジア)

計48名



## 2-2. 参加大学一覧

---

### >既存参加国

ブルガリア：Varna Free University

日本：東京大学、創価大学

キルギス：Kyrgyz National University

メキシコ：National Autonomous University

of Mexico, Universidad Nacional Autónoma

de México

パキスタン：Lahore University of

Management Sciences, IBA Karachi

シンガポール：National University of

Singapore

スロバキア：Selye János University

チュニジア：Tunis El Manar University

### >新規参加国

アメリカ：Metropolitan State Denver

ペルー：国際基督教大学(留学生)

## 2-3. 議題・本会議構成

---

### 議題

#### マイノリティ(Belonging to a minority)

### 議題概要

セクシュアルマイノリティ、エスニックマイノリティ、障害者など様々な分野で不均等な関係を生じるマイノリティ対マジョリティという構図。近年マイノリティに対する差別に対する抑止力の不在が明らかになりつつある中、マイノリティ問題の背景の要因を分析した上で、マジョリティがマイノリティを受け入れマイノリティと共生するということの可否という問題について多様な視点を生かして議論した。

## 議題選定理由

## 1. 2019年にマイノリティ問題を論ずる意義

2018年は、フランスでのイエロー・ベスト運動や、アメリカでの予算案否決による公的機関の長期閉鎖、合意なきBrexitなど、マジョリティとマイノリティが合意に至るのを放棄してさらなる不安定化に向かう中で終わりを迎えた。この様な世相の中、マイノリティとマジョリティの共生の仕方について世界中の学生が再考することは大きな価値があると考えた。

## 2. GNLFでマイノリティ問題を論ずる意義

GNLFの本会議の特徴は二つの多様性である。一つ目は、参加者の国籍の多様性である。一般に先進国や英語圏ほど国際交流が盛んで、学生が国際交流を通じて知り合える人間には地域的な偏りがあることが多い。GNLFは世界各国の大学教授とネットワークがあり、特定の地域によらず世界各地から参加者を募集することができる。多国籍の学生とマイノリティ問題について互いそれぞれが前提としていることを崩して議論することで、より深い理解が得られると考えた。二つ目は、視点の多様性である。学生団体という性質上教育機関との結びつきはもちろん、スポンサーの企業様、様々な分野のNPO・NGOなど様々な立場の方からのご協力をいただいている。これにより、マイノリティ問題について様々な立場から考察を深めることができると考えた。

## 3. マイノリティ問題とGNLFの関係

GNLFの活動理念は、「次世代のグローバルリーダーの育成」である。マイノリティへの差別の形成過程や、マイノリティとマジョリティとの共生のあり方について議論できることはグローバルリーダーとなるにあたって不可欠であり、また、マイノリティ問題の理解が深い人ほど良きリーダーであると考えた。



## セッション0

各国のマイノリティ問題

## セッション1

マイノリティとは何か

## セッション2

マイノリティ問題の多様性

事例の分析: カタルーニャ、LGBT、etc.

移民についてのケーススタディ

## セッション3

マイノリティと共生

障害者アートとステレオタイプ

インクルージョン/インテグレーション

## セッション4

マイノリティ問題の解決策

フィールドワーク

パネルディスカッション

ロールプレイングゲーム

解決策のポスターセッション

### 本会議構成

2018年度の本会議は、テーマであるマイノリティについて5つのセッションを通して議論した。マイノリティ問題について議論する際によく見られる「マイノリティを受け入れることで問題は解決される」という表面的な理解について疑問を持つことを前提として、実際に「マイノリティを受け入れる」ということが心理上、社会上でどのような意味を持つのかについて深く考察することを目的としている。以降10ページから19ページで各セッションについての詳細な説明を掲載している。



## 2-4-1 開会式・基調講演

本会議初日となる2月23日には、国立オリンピック記念青少年総合センターの会議室にて  
 ・開会宣言  
 ・読売新聞社より、加藤賢治様による基調講演  
 ・参加者に事前課題として課していた参加国ごとのプレゼンテーション  
 が行われた。

最初に18年度会頭の林航平より挨拶があり、プログラム局長の倉石東郎による会議全体のプログラム構成の説明、募集局長の伊藤貴将から本会議期間中の生活についての説明を行った。

続いて読売新聞社より、基調講演者として加藤賢治様をお招きし、約30分間にわたりご講演を頂いた。ご講演内容はこれまでの加藤様の世界各地での取材経験に基づいたものであり、マイノリティ問題の実情に迫るものだった。講演の後の質疑応答の時間には参加者から「日本ではどんなマイノリティ問題が盛んに取り上げられるか」など日本のマイノリティの事例について質問があり、それを元に活発な議論が行われた。

最後に自己紹介を兼ねて、参加者からの参加者自身および自国に関するプレゼンテーションが行われた。参加者それぞれが所属するマイノリティを告白するなどし、意義深い時間となった。



基調講演者： 加藤 賢治 様

読売新聞社編集局英字新聞部課長

中央大経済学部卒、米デラウェア大国際関係学部卒、米アメリカン大学School of International Service修了。1993年、読売新聞社東京本社入社。福島支局、金沢支局、浜松支局など、国際部長として、ヨハネスブルグ支局、カイロ支局、エルサレム支局、ニューヨーク支局、ロサンゼルス支局に勤務。2017年9月から英字新聞部。





## 2-4-2 Session 0

### セッションの目的

同じ「マイノリティ」とあっても、思い浮かべられる意味は様々である。数の上でのマイノリティがあれば、社会的なパワーバランス即ち「社会的弱者」をマイノリティに含めることもある。また、マイノリティの性質も多様である。そのマイノリティを区別する基準は先天的な性質に基づいているものか、それはある劣等性を持った性質に基づいているものか否か。そのレッテルによって自分は日常生活にどんな影響を受けているか。

このセッションは現代において明らかに差別され被害を被っているマイノリティ問題をその後のセッションにおいて議論する土台として位置付けられた。すなわち、現代のマイノリティ問題を概観した上で、自分がどのようなマイノリティに所属しているかを知ることを目的として設定した。

具体的には、プログラムの幕開けにあたるセッションと位置づけ、誰もが現代で生きる中で抱える違和感や差別意識を、アカデミックではなく直感をベースにブレインストーミング形式で話し、論点の列挙・各参加者の視座の違いの把握・他のセッションの議論への導入の機会とした。

### 概要

国立オリンピック記念青少年総合センターの研修室にて、2月19日の午後に行われた。参加者を1グループに教授を含めた6-7人のグループに分け、9期総務局長合田のファシリテーションのもと、議論を行なった。



第一段階として、参加者の一人ひとりが配布されたプリントに「自分がどんなマイノリティに所属しているか」「自分の国ではどんなマイノリティ問題があるか」

を書き出す時間を設けた。

第二段階では、教授を含む5-6人のグループになって書き出したことを30分程度共有し、その後それぞれの班の代表者が自分の班での議論を簡潔に壇上で発表した。日本人参加者からは沖縄の米軍基地問題が本土で軽視されているといった意見やアイヌなどの少数民族問題が提議された一方、海外参加者からは言語の違いにより国内の民族が分断されている意見から参加者自身による人種差別への提言などもあり、また性的マイノリティなど国境を超え遍在するマイノリティへの言及も各国から散見された。

## 2-4-3 Session 1

## セッションの目的

本フォーラムにてマイノリティを扱うに当たってそもそも「マイノリティ」とは何か、という定義は重要である。しかし単に数が少ないだけで「マイノリティ」であると識別されるわけではない。その中で数少ないだけでなく何をもって「マイノリティ」とされるのかという共通認識や文化的・社会的な視座の差異を共有するためのセッションの構成となっている。

「マイノリティ」から連想される概念として弱者や代表があまりされていない集団など定義は幅広く、曖昧である。また国や文化によってどこまでの集団を「マイノリティ」として含めるべきなのかや、寛容に受け入れられているのかどうかは大いに異なる。

本会議セッションの冒頭に当たる本セッションでは「マイノリティ」の定義がいかに多様であり、またいかに弱者性や差別性を包容しているのかを共有し、討論することにより、様々な意見の違いを認識し、他のセッションへの導入を目的として本セッションを企画した。



## 概要

国立オリンピック記念青少年総合センターの研修室にて2月20日の午前中に行われた。

本セッションでは弊団体メンバーの田村がプレゼンターを務め、彼女が参加者に問いかけた質問に対して参加者を肯定派と否定派の2グループに分けたのち、グループ間で議論を行った。

「Do you think you are a minority?」という抽象的な問いから始め、続いて、マイノリティと定義される可能性のある様々な具体的な集団が参加者たちあるいは参加者の母国で実際にマイノリティであるのかどうかを問いかけた。

始めにホームレスの人たちが各国においてマイノリティであるか問いかけたところ、参加者の全員がyesと回答した。

次の質問の「Do you think pregnant women are minorities?」では日本人参加者のみが「Yes」と回答した。「No」と回答したものは妊娠することは女性が経験する自然な過程であり、数では少ないとしても一般的な「マイノリティ」のように差別の対象にはならないとした。マイノリティマークを妊婦さんは母子手帳と一緒に受け取るという日本固有の事情があり、このような結果となったと考えられる。

3個目の質問では性的マイノリティーや宗教的なマイノリティーに同じ問いを投げかけ、そこでは同様に文化や国による違いが反映されていた。またその後大学や教育についての質問をし、システムの違いから生み出されるマイノリティーも話題となった。



そしてこの部分の最後の「受刑者をマイノリティとするかどうか」の質問に対しては最も活発な議論が見られた。犯罪者/非犯罪者の区別は後天的な性質に基づいて人為的に設けられた境界であるという点、また、個人が自ら選んで犯罪を犯しているという点から、マイノリティという抑圧を受けている集団としての枠に入れることに戸惑いを見せる参加者もみられた。しかし構造的に抑圧されているがゆえに犯罪を犯してしまう人たちもいることからマイノリティという点も指摘された。

最後の質問として、「自分がマイノリティであると思うか」を問い、改めてマイノリティの広汎で多様な定義について問いかけるセッション構成となった。今回のセッションのトピックとしても用いられている「マイノリティ」という概念が、自身の文化や体験に影響された価値観により定義されているということ実感できるような事例により、文化的な差が際立つ議論が見られた。

#### 目的の達成度評価・反省点

質問をバランスよく構成することができ、満場一致でマイノリティとされるものから、国によって分かれそうなものなどを組み合わせたことができた。また妊婦の方の例など特定の国に特有なマイノリティの認識なども伺うことができた。続くセッションにおいてマイノリティが個人や国・文化によって全く違う位置づけにあたり、その背景にある対立構造との因果関係に気づく契機となったセッションであった。ただ、マイノリティだと普段認識されない例を数個多

く提示していればさらに議論が展開されていた可能性は否めない。また、以降のセッションと結果的に類似した議論を行うことになったこともあり、セッション1以降のセッションとの内容と重複しないような事例をあげるように次回からは心がける必要がある。



## 2-4-4 Session 2

### セッションの目的

このセッションでは「マイノリティ問題」を表面的ではなく、重層的に分析することにより、現在起きているマイノリティ問題と複雑な世界の関係と、理想を追求して単純にマイノリティを受け入れることの困難さについて考察した。

### 概要

このセッションは主に2つのパートにより構成された。一つ目に「分析パート」、二つ目に「ケーススタディパート」である。

この2つのパートを通して、主に4つのトピックについて議論を深めた。一つ目に「それぞれのマイノリティの特徴と『共生』のあり方の多様性」、二つ目に「『マイノリティを受け入れる』ということの意味」、三つ目に社会的弱者としてのマイノリティが持つ「弱者性」について、四つ目に「社会的弱者としてのマイノリティにとって良い環境はいかに作り出すべきか」についてである。



### 目的の達成度評価・反省点

セッション全体を通して、「マイノリティ問題」の多様性や複雑性について参加者に対し集中的に深く理解をはかることができた。それに対して、トピックに対しての全て知識に参加者の間で差があり、その差を埋めるための配慮が薄かった。

まず一つ目のパートでは、一つ目と二つ目のトピックについて主に具体的な事例をベースに議論した。参加者は様々なマイノリティをこのセッションを通して知ることができたと反応しており、マイノリティの事例の紹介というセッションの目標の一面は達成できたと認識している。

一方で、参加者はこのセッションをあくまでマイノリティの個別の問題の仕方と捉えている節があった。そのため、一般的にマイノリティが社会的に融和できていないことにはそれだけの理由があるのではないかという、こちらが提示したかったもう一つの側面を参加者と共有しきれなかった。

扱うトピックが4つだったため、その都度議論の間に休憩をとっていた。これはマネジメントの上で必要ではあったが、後半に連れて参加者にも疲労が見られ、議論の失速が見られたことは否めない。

翌日は、自国のマイノリティを紹介するというものだったため、参加者は積極的に紹介しあっていた。やはり自分の体験や周りの状況をもとに話すというセッション内容は参加者にとってやりやすく、また、他の参加者の学びが深くなると実感した。この点は評価するべきである。



他方、LGBTを中心としたセクシャル・マイノリティを扱った部分では、それぞれの国の状況を含めて議論できたので、議論が活発に行われた。かなり意欲的に参加者も取り組んでいた。しかし、カタルーニャとロヒンギヤが想定していたより学生参加者の間での認知度がかなり低かった。そのため、議論を始めるまでに前置知識をネットで調べなければならないという人が多く、時間がかかった。また、こちらが期待していた理解がないために、その議論が薄いものとなってしまった。

次に二つ目のパートでは日本の移民女性についての実践的なケーススタディを行なった。具体的には、国際結婚をし日本に来た子供持ちの女性を題材にし、その女性に対してアドバイスをするというテーマについて参加者は議論した。

「日本への移民が直面している差別について知ることができた」とあったり、このセッションの中で最も印象に残っているものとして「(社会的弱者の)弱者性」であると回答する参加者も見受けられたりなど、このセッションの目的の一つ「社会的弱者としてのマイノリティが持つ「弱者性」について理解する」を実現できたと実感している。しかし他方で、外国人女性が取得可能な日本のビザについてなど議論で使用する法律的な知識に関して、参加者に対してそれが認識として知れ渡っていなかった。



## 2-4-5 Session 3

## セッションの目的

他のセッションで扱われているようにマイノリティは弱者として困難を抱えることが多いが、アート、芸術というマイノリティであることがスティグマになりにくい領域におけるマイノリティとマジョリティの関係性について考えることで、セッション4において「共生」の解決策を考えるヒント、新しい視点を獲得してもらうことが本セッションの目的である。

具体的には、日本における「障害者アート」を例に、現状分析と解決策の検討を通じてステレオタイプの影響やインテグレーション・インクルージョンとの親和性について考えた。



## 概要

セッションは2日間、2パートに分けて行った。

## ・障害者アートとステレオタイプ

1日目は、アール・ブリュットの概念と日本における障害者アートの歴史と現状を紹介し、ステレオタイプに沿った障害者アートのみが取り上げられる場合の功罪を、「障害者」「美術館の館長」「障害を持たない鑑賞者」の三つの観点から考え議論した。

障害者アートのプロモーションにおいてステレオタイプが利用されることに関しては否定的な意見が多く出たが、一方でそのわかりやすさから商業的利益には結びつきやすいため、ステレオタイプを利用するインセンティブがあることも指摘された。

## ・アートの領域におけるインテグレーション/インクルージョン

2日目は、インテグレーションとインクルージョンという二つの概念が、アートという領域の中で、特に障害者アートにおいてどう適用されるか、展示会をどのようにデザインするかという課題に取り組んだ。この中で、インテグレーション・インクルージョンの概念を扱った上で、理想の「マイノリティとアート」の状態を考えた。インクルージョンの立場に立ったデザインが多かったが、インテグレーションの考え方を取り入れたアイデアもみられた。

目的の達成度評価・反省点

インテグレーションとインクルージョンという二つの概念はよく理解され、次のセッションに向けた新たな視点の獲得という課題はよく達成された。参加者からは「展示の企画を通してインテグレーション・インクルージョンへの理解が深まった」といった声聞かれた。

一方で「詰め込もうとしすぎていて、セッションの構成が分かりにくい」といった意見がみられ、構成面で洗練しきれなかったという課題や、「アートに興味がなく自分事として考えられなかった」「扱うテーマがニッチすぎた」といった意見からテーマ選択に関する課題も発見された。特に構成面の課題に関しては直前に構成の変更を行ったことが大きな原因である。早い段階から概念の導入や論理構成などにより注意を払って準備を進めていくべきであった。責任者の個人的な所感としては、先述したように直前でのプログラムの内容・コンテンツの変更があったことで、導入と中身やコンテンツ同士の整合性が分かりにくい部分が発生してしまったことが最大の反省である。当初のセッション設計の際に論理の穴を作ってしまったことが大きな原因であった。

アートという、日常生活に密着しているとは言  
い難い分野において「マイノリティ」を論じる  
ことは、特にマイノリティという全体的なテー  
マの中での位置づけという面で困難があった。  
しかし、インテグレーション・インクルージョ  
ンという概念の導入によって、セッションでの  
議論がマイノリティー一般への拡張可能性をも  
っていることを示したことで、プログラム全体  
の中に解決策へのヒントという重要な視点を与  
えられたと思う。





## 2-4-6 Session 4

## セッションの目的

Session 4は、本会議期間で学んだことの集大成として、現在生じているマイノリティ問題の解決に貢献できる具体的な行動計画を立てることを目的とした。

「マイノリティ問題に対するアプローチ」について実際のプランをプレゼンテーションを行ってもらうことをグループワークの最終課題と設定した。その最終課題に取り組むにあたり、このセッションでは、パネルディスカッション、フィールドワーク、ロールプレイング、プランニングの四つの場面に分かれた。

他のセッションでは与えられたテーマに対して議論することが多かったが、このセッション、特にプランニングでは問題設定の段階から解決策提示まで全て参加者が行った。ただしプラン考案のための問題設定の段階からプランのブラッシュアップの段階にかけて、必要な論点を運営から提示し、そのクエスチョンに従って参加者はプランを考えた。プランを各グループで考えたあと、最終的にはポスターセッションで他のグループのプランに対して評価をし、教授から講評をいただいた。

また、23日の午後には、マイノリティ問題に最前線に取り組んでいるNGO/NPO、ボランティア団体、国連機関に伺って活動についてお話をうかがったり活動の一部に参加させていただいた。1と2の補助的なアクティビティとして、これらの団体にお話を伺い、活動理念や実際の活動の上での難しさなどについて伺った。

フィールドワークにご協力いただいた団体様







鹿角 契 様

GHIT Fundの投資戦略、ガバメント・リレーションズを統括。独立行政法人国立国際医療研究センター（前国立国際医療センター）にて医師として勤務したのち、フルブライト奨学生として米国ジョージア州アトランタ大学公衆衛生大学院で公衆衛生修士号（MPH）を取得。その後、米国East West Center、世界銀行勤務（ヘルススペシャリスト）を経て、2013年より現職。東京大学医学部医学科卒業。日本・米国（CFMCA）両方の医師資格を有する。東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻生物医化学教室非常勤講師。日米リーダーシッププログラム・フェロー。



水上 友里恵 様

1991年生まれ。2014年に慶応大学法学部法律学科を卒業後、渡米。2015年ロンドン大学大学院LSE社会学部人権学科を終了。慶大在学中エディンバラ大学に交換留学を経験した。国際NGOのHuman Rights Watch、国連児童基金（UNICEF）のインターンを経験後、2016年に国際協力機構（JICA）アフリカ部に勤務。2018年よりNY発のコワーキングスペース事業WayWorkのコミュニティマネジメント職に従事する傍ら、居住型教育事業HLABをボランティアとしてサポートしている。



熊谷 晋一郎 様

東京大学先端科学技術研究センター准教授。小児科医。東京大学バリアフリー支援委員。新生児仮死の後遺症で、脳性マヒに。以後車いす生活となる。東京大学医学部医学科卒業後、千葉西病院小児科、埼玉医科大学小児心臓科での勤務。東京大学大学院医学系研究科博士課程での研究生活を経て、現職。専門は小児科学、当事者研究。主な著作に、「発達障害当事者研究」（共著、医学書院、2008年）、「痛みの哲学」（共著、青土社、2013年）、「みんなの当事者研究」（編著、金剛出版、2017年）、「当事者研究と専門性」（編著、金剛出版、2018年）など。



24日の午後には、マイノリティ問題に取り組むアクターによる活動の違いについて明らかにするため、マイノリティ問題に取り組んでいらっしゃる方を招待して「マイノリティ問題に対するアプローチ」というテーマでパネルディスカッションを開催した。熊谷先生は登壇を予定していたが、本人の急なご都合によりご登壇いけないこととなったので、当日は急遽鹿角様、水上様のお二方にご登壇いただいた。その後、25日を通じて、参加者は5-6人のグループに分かれ、解決策の発表に向けてポスターを作成した。

## 2-4-6 Session 4

## 目的の達成度評価・反省点

最終課題のプランニングまで概して滞りなく行うことができた。その要因としては2点ある。まず第一にプログラム構成や、参加者に対して提示する資料もしくは問いかけが、参加者の議論を妨害することなく無駄がなかったからである。例えば、ロールプレイングではゲームのルールと、各アクターの設定を簡潔にまとめた資料のみ提示し、その後の主張をどのように組み立てもしくは他者に対しどのように提示するかは参加者の発想に委ねた。

またプランニングでは、問題設定、現状分析、理想の設定、具体的な政策内容の決定、政策評価などプランニングにおいて考えるべき必要最低限の論点を運営から提示した。それによって、プランニングにあまり慣れていない参加者でもその問いかけに答えることを通して、構造的にプランニングを行うことができた。

二つ目に、このセッション全体を通して参加者の自発的な議論がこのセッションの成果物に直結するプログラム構成にしたことにある。

フィールドワーク、ロールプレイング、プランニングにおいて参加者が積極的に議論すれば、それほど参加者はより大きくわかりやすい成果を得られるようにプログラムを設定した。そうした自発的な動機付けを様々なところに設定したプログラム構成により、参加者はこのセッションを通し議論を掘り下げることのやりがいを感じやすかったと考える。





## 2-4-7 閉会式・報告会

### セッションの目的

報告会の次第は以下の通りである。

会頭挨拶

スポンサー紹介

本会議総括

参加者代表(4名)によるスピーチ

参加賞授与

教授からのコメント

冒頭の会頭挨拶では、会頭の林が開会式の会頭挨拶でも引用した性格心理学者Gordon W Allportに改めてふれ、本会議を締めくくった。弊団体プログラム局長倉石による本会議総括のあと、参加者代表(4名)によるスピーチが行われた。スピーチから抜粋した内容は以下の通りである。

宗教や過去のトラウマなどの背景から、マイノリティに対して悪いイメージを抱いている人はいると思います。全ての人間に個々の見方があるからこそ、全員がマイノリティを好きになるのは不可能に近いです。大切なのは、多数派に対してと同じように、マイノリティを「人の人間」として扱うことです。このような社会にするためには、私たちは誰がマイノリティであり、何が彼らを苦しめているかを知る必要があります。

私がフィールドワーク先(ホームレス支援団体)で見たのは、過酷な現実には驚きませんでした。そしてそれは私が思っていたよりはるかに深遠でインパクトがありました。彼ら

の表情はどういうわけか自信がないことを示し、そしてほとんど笑顔を見せませんでした。物質的な援助は残酷な現実の前にはほとんど影響力がないようでした。私は、社会が創造し強化している偏見を認識し、それを癒すことによって初めて問題が解決されることを認識しました。

このトピックは日常に遍在する、すなわち誰もがマイノリティでありまたマイノリティの知人をもつ現代を生きる我々のすべての心を穿つものでした。すでに差別からの解放を望みマイノリティを助けようとしている者もいます。このフォーラムは社会がどう動き同じ状況下で人々がどう異なって行動するかを創発することを通して、マイノリティを認識する好機となりました。妊娠中の女性に関する議論はとても面白い例であったと思います。

GMLFは、留学生同士のコミュニケーションの架け橋となる、意欲的で革新的なフォーラムです。驚くべきことは、これが草の根レベルで起こっているということです。セッションのトピックを準備し、プログラムを管理し、そしてフォーラムの運営を行うのは日本人学生です。私はこれが賞賛に値する、そして間違いなくもっと包括的な種類の学生組織に向けての非常に重要な一歩だと思います。まず第一に、助成で信じられないほど親切なGMLFスタッフ、そしてもちろんこれを可能にしてくれたスポンサーに感謝します。

## 2-5-1 文化交流会

2月22日の午後より、各参加者が民族衣装や軽食などをもち寄って自国の文化を紹介する文化交流会を開催した。場所は、新宿Hitopia、パンケットHallで、参加国ごとに自国の文化などについて簡単なプレゼンテーションを行った後、各国のブースを自由に回れる立食パーティーのような形式で行った。会場は昨年度の反省を踏まえ、滞在しているオリンピックセンターからのアクセスを考慮して選択したため、移動の際に問題なども生じなかった。

昨年と同様、一部の国ではプレゼンテーション時間が規定より長くなるなどのハプニングも生じたが、ある程度は予期していたこともあり、大きな問題とはならなかった。明らかな不公平感などが生じ、一部の参加者が不満を持つ可能性があるようであれば今後プレゼンテーションの時間についてさらに規制を強めることも一案だが、現段階ではそれらの対応が必要となる程ではないと考えている。

参加者と運営メンバー、教授が入り混じり、互いに写真を取り合うなどお互いの文化への理解・尊敬を高め、親交を深め合うのに良い機会となった。





## 2-5-2 GNLFAラムナイとの座談会



2月24日の午前には、GNLFに過去に在籍していたメンバーや、昨年度GNLF本会議にファシリテーターとして参加していた留学生が訪れ、参加者との間に交流を楽しむ時間を設けた。卒業生の進路に関わること、過去の本会議に関して、マイノリティというトピックに関してなど、三名のアラムナイがそれぞれの意見を展開した。外部会場を使用していたこともあり、当初予定していたよりも時間が多少巻いてしまい、質疑応答の時間が短くなってしまったことが反省点である。



## 2-5-3 東京観光

運営メンバーや日本人の参加者などが引率して、都内の各地を回る機会が数回あった。メンバーごとにおのおの興味のある場所を回り、本会議の開催地である日本への理解を深める機会となったと考えている。しかし一方で、本会議に観光のための時間が少ないと考えている参加者や、日本での開催ということ踏まえて、日本の文化や風俗がもっと紹介されるべきだっ

たと考える参加者もいたため、アカデミックなコンテンツと互いの親交を深めるための時間とのバランスという点では課題を残した。また、事前に、観光の時間はあまり取っていないということを書面では通告していたものの、それだけでは共通認識に到達することができていなかったことが明らかになった。

### 3-1 ご連絡先

本報告書に関するお問い合わせは、下記GNLF学生本部連絡先まで  
お願い致します。

住所

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-6 アトラスビル6階 IBIC本  
郷内

公式ホームページ

<http://jp.g-nextleaders.net>

メールアドレス

[gnlf-hq@g-nextleaders.net](mailto:gnlf-hq@g-nextleaders.net)

団体Facebookページ

<https://www.facebook.com/GlobalNextLeadersForum/>

団体Twitter

[@GNLJapan](https://twitter.com/GNLJapan)



**GLOBAL  
NEXTLEADERS  
FORUM**

## 3-2 会計報告

支出の部		
旅費		
A.海外参加者旅費		
参加国	費用	
キルギス	¥218,680	
シンガポール	¥93,300	
スロバキア	¥172,920	
アメリカ	¥279,620	
チュニジア	¥487,300	
パキスタン	¥418,000	
ブルガリア	¥296,460	
メキシコ	¥470,580	
	小計	¥2,337,060
B.日本国内旅費		
項目	費用	
成田・羽田空港出入	¥32,712	
成田・羽田通り入	¥2,686	
	小計	¥35,398
食費・宿泊費		
A.宿泊費		
項目	費用	
オリンピックセンター	¥1,077,300	
	小計	¥1,077,300
B.食費		
項目	費用	
オリンピックセンター	¥300,800	
文化交流会	¥7,084	
	小計	¥307,884
経費金消費		
項目	費用	
文化交流会	¥125,000	
2024 印刷	¥65,880	
開会式	¥90,936	
	小計	¥281,816
雑費		
項目	費用	
VISA取得代	¥4,840	
備品代	¥89,297	
講演者謝礼金	¥300,000	
手数料	¥7,308	
印刷代	¥50,000	
名刺作成費	¥7,722	
郵便代	¥15,372	
メールアドレス・サーバー代	¥20,633	
新聞購入代	¥60,000	
web代	¥46,308	
雑費	¥32,076	
	小計	¥453,456
当期支出合計(C)		¥4,272,814

収入の部			
参加者負担			
参加国	参加費	人数	収入
キルギス	¥77,700	2	¥155,400
シンガポール	¥77,700	2	¥155,400
スロバキア	¥77,700	3	¥233,100
アメリカ	¥77,700	2	¥155,400
チュニジア	¥77,700	5	¥388,500
パキスタン	¥77,700	5	¥388,500
ブルガリア	¥77,700	2	¥155,400
メキシコ	¥77,700	3	¥233,100
日本（一般参加）	¥30,000	4	¥120,000
日本（運営）	¥30,000	15	¥450,000
		小計	¥2,434,800
賛成金収入			
財団名	収入		
公益財団法人 平和中島財団	¥400,000		
公益財団法人 双日国際交流財団	¥300,000		
公益財団法人 三菱ufj国際財団	¥300,000		
	小計		¥1,000,000
企業協賛収入			
企業名	収入		
三菱商事株式会社	¥500,000		
株式会社スカラ	¥100,000		
株式会社futurelabo	¥2,900		
	小計		¥602,900
寄付金収入			
団体名	収入		
一般社団法人 東大駒場友の会	¥220,000		
	小計		¥220,000
運営費支出			
項目	収入		
運営費出金	¥20,000		
	小計		¥20,000
当期収入合計(A)			¥4,277,700
前期繰越収支差額			¥27,007
収入合計(B)			¥4,304,707
当期収支差額 (A)-(C)			¥4,886
時期繰越収支差額 (B)-(C)			¥31,893

# 付録：各セッション質問事項

※コメントは一部抜粋

## 基本質問事項

\*それぞれのセッションのアンケートの以下の項目のいずれかが含まれていました。

- ・ マイノリティについて新しい知見は得られましたか。
- ・ 上の質問で「はい」と答えた場合、その具体例をあげてください。他方で「いいえ」と答えた場合、その理由を教えてください

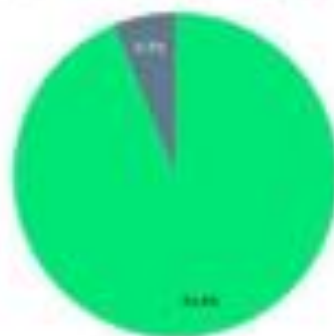
(自由記述式)

- ・ このセッションの良い点、悪い点は何ですか。(自由記述式)

## Session 1

このセッションで何か新しい考えを知ることができましたか？

- ・ Yes
- ・ No



「はい」と答えた人が興味深かったと思う考えやトピック

- ・ マイノリティの定義の複雑性
- ・ 妊婦の女性や犯罪者が「マイノリティ」に含まれるということ
- ・ 自分自身がマイノリティになりうるということ

このセッションの良い点を教えてください。

—異なる国の間でマイノリティに関する意見を交わすことができ、さらにその意見が自分のものと違うことを認識できた。

—意見を交わす際に、個人的な経験をもとにマイノリティについて議論することができた。

このセッションの良くない点を教えてください。

—長時間立ちながら議論することは大変だった点。

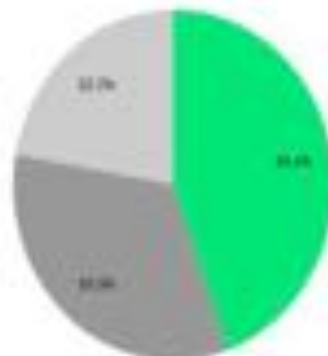
—Yes/No クエスチョンに固執しすぎていた点。

## Session 2

分析パートは満足できましたか？

(Great/Not so good/Not so bad/So-so/Bad)

- ・ Great
- ・ Not so bad
- ・ So-so



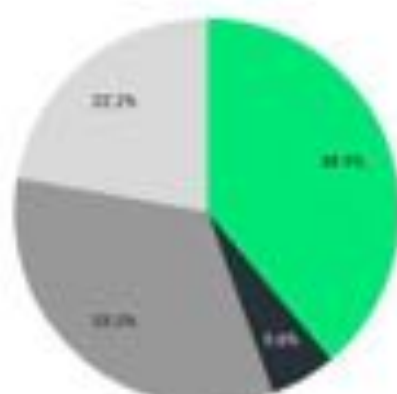
もっとも興味深かった考えやトピック

- ・ 他の国の多様なマイノリティについて
- ・ ロヒンギヤやカタルーニャの深刻な現状について
- ・ 自発的に発生したマイノリティと強制的に発生したマイノリティの分類について
- ・ 「共生」という概念と、その意味について



移民女性に関するケーススタディのパートは満足できましたか？  
(Great/Not so good/Not so bad/So-so/Bad)

- Great
- Not so good
- Not so bad
- So-so



#### 感想

- 日本人の観点を学べたことは興味深かった。
- 事前説明によって「マイノリティの持つ脆弱性」について詳しく知ることができてよかった。
- このようなケースでは国は外部の国からどのように見られているかに影響を受け、他方で労働市場の不足のために、より多くの移民または外国人労働者が国内の雇用市場に参入し、彼らは彼らの私事に関して法的保護を必要としている、ということが理解できた。
- このケースはすでに知っていることだったため、少し退屈だった。

このセッションの良い点を教えてください。

- 自分の国に加えて、他国のマイノリティについて多重に知ることができたことはとてもよかった。
- 現在進行形で起きているマイノリティの問題について議論できたことはよかった。

このセッションの良くない点を教えてください。

- たくさんのトピックを長時間議論し続けたことは少し退屈だった。
- このセッションは、Session1と重なるところがあると思った。より多く他の文化や社会について知るために、Session2では途中でグループを変えるべきであったと思う。
- たくさんの国の学生が来ているのだから、もう少し他国のマイノリティの問題について共有し議論する時間が必要であったと思う。

## Session3

「インクルージョン」と「インティグレーション」の違いについて理解を深めることはできましたか？ (Great/Not so good/Not so bad/So-so/Bad)

- Yes
- So-so
- No



#### 「はい」と答えた人

- この二つの概念は時折別々なものとして語られることが多いが、その異なる両者は、もっと関連させて互いに生きるような使い方が社会においてなされるべきだと思った。
- 心理学の分野で勉強したことがあったが、マイノリティの文脈でこの二つの視点を学べたことはよかった。
- 芸術は主観的なものであるため、様々なアプローチの仕方が評価されるべきであると思う。芸術はインクルーシブなものであるべきであり、芸術の分野で身体的な差異は欠点になるべきではないと感じた。

このセッションの良い点を教えてください。

—日本の文化と歴史について学べたことはよかった。

—以前、芸術をマイノリティと考えていなかったが、サイケデリックな色のついた絵の議論は非常に興味深いと思った。

このセッションの良くない点を教えてください。

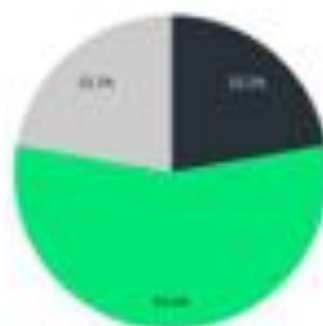
—芸術に興味がない人にとっては退屈な時間だった。

—タイムマネジメントを厳密にすべきだ。假られた時間の間で真剣な議論を促すべきだ。

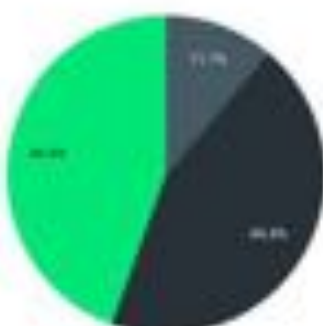
—テーマがやや狭すぎたように思う。障害者の手当で起こる問題について論じるのなら、一般的な障害者の問題についても取り扱うべきであった。

## Session4

各パート(フィールドワークパネルディスカッション/ロールプレイングゲーム/プランニング)の満足度を教えてください。(Great/Good/So-so/Bad)



フィールド  
ワーク



パネル  
ディスカッション



ロール  
プレイング



プランニング

○ No Answer

● Great

● Good

○ Not participating

● So-so

フィールドワークで得た新しい考え

- ・ 地方のコミュニティがいかにLGBTなどのマイノリティの支援で活躍しているかが理解できた。
- ・ LGBTQとしてのアイデンティティを持っている人が支援をどのようにして求めているのかということの方法を知ることができた。
- ・ 日本にいるホームレスの方々の姿が印象に残った。

パネルディスカッションで得た新しい考え

- ・ それぞれのパネリストがどのようにして現在の分野でキャリアを積むようになったのかということが参考になった。
- ・ 若者との交流や対話の機会を設けているコミュニティづくりに感心した。

ロールプレイで得た新しい考え

- ・ マイノリティ以外の立場の視点からマイノリティについて考えることは貴重な経験であり、交渉スキルの向上につながった。

このセッションの良い点を教えてください。

—プランニングの問いかけの仕方、プレゼンテーションの仕方がとても魅力的であった。

このセッションの良くない点を教えてください。

—ロールプレイングのゲームで内容を理解していない人がいたので、説明をもう少しわかりやすくすべきだと思った。

## 全体を通してのご意見(抜粋)

今回の会議の良い点を教えてください。

- 参加者の多様性や、参加者が熱心にディスカッションに貢献しようとするところがとてもよかった。
- 多様なディスカッショントピック、毎セッションでの様々なグループによって、異なる価値観や意見を知ることができてとてもよかった。
- ディスカッションの後の自由時間の時に、スタッフが親身にサポートしてくれたことはとても素晴らしい。

今回の会議の良くない点、改善点を教えてください。

- セッションの初めに、セッション全体の目標と、他のセッションとの違いについて説明するべきだったと思う。
- ディスカッションの時間が長すぎたと思う。自由時間とディスカッションの時間のバランスを整えるべきである。
- 日本文化を体験するアクティビティがあるとよかった。
- マイノリティの方との交流の機会や、マイノリティに関するゲームの時間をもっと設けて欲しい。
- プログラムにゲームなど親和性の要素を入れるべきだった。

今回の会議を通して何か変わったことがあれば教えてください。

- 多様な参加国の、マイノリティの問題について新しく知ることができた。
- リーダーは、「違い」を受け入れ、多様性を大切に、そして中立的に物事を考えるべきであるということを知ることができた。